

エロスとしての言葉

—カール・クラウスの言語観—

木下 康光

一、「炬火」

全精力を注ぎ込んだこの雑誌はまさに彼の分身、クラウスの存在そのものと言ってもよいだろう。

のちに稀代の諷刺家・時代論難家として知られるようになったカール・クラウス Karl Kraus (一八七四—一九三六) は、満二十五歳の誕生日を迎える直前の一九〇九年四月、オーストリア帝国の首都ウィーンにおいて個人雑誌『炬火』^{ファッケル}を発刊した。以後全部で九二二号、その死に至るまで三十七年近くの長きにわたってクラウスは総頁数三万頁を超えるこの雑誌を殆ど独力で執筆し発行し続けたのであった。クラウスが終生にわたってその

『炬火』創刊の反響はすばらしいものであった。はじめ用心して数百部しか刷らなかつた第一号は数日後には数千部、二週間で三万部増刷しなければならなかつた。まさにウィーン子の話題を独占したと言えるこの雑誌の創刊は、文学史上稀有な事件となつた。「一夜明けるとウィーンの町は赤一色だった。……人々はみんな路上でも公園でも、市電の中でも赤い冊子を読んでいた。」とややセンセーショナルに伝えられている。⁽¹⁾人々は随所に

ちりばめられた皮肉や諷刺、洒落、あてこすりをひとつも見逃すまいとして目を皿にし、競い合うようにしてこの赤い表紙の雑誌を読んだのであった。

クラウスはその創刊の辞で、「へ我々は何をもたらすか」(Was wir bringen)といった大言壮語でなく、
 「我々は何をくたばらすか」(Was wir umbringen)という正直な言葉を本誌はそのモットーに扱んだ」と宣言しているが、クラウスの仮借ない批判の矛先が向けられ、痛烈な諷刺の対象となったのは、世紀末ウィーンの世界の至る処に露呈していた精神の腐敗であり、ブルジョワ道徳の偽瞞性であった。のちに『炬火』刊行二十年を回顧して書かれた『二十年後』という詩の中で、彼はこの雑誌の発刊(一八九九年四月一日)を「真面目な四月ジョーク」と呼び、

躑躅と懲らしめ、光と火であれ

と、あらためて『炬火』の使命を確認している。すなわち純粋な人間性に基づく真の道徳の涵養と虚偽の暴露と弾劾を行なうもの、そしてまた真理と希望の光とともに悪徳を焼き滅ぼす劫火をもたらすものたらんとするのである。『炬火』という誌名はそのような断固たる決意の表明であった。当時のウィーン社会にクラウスが見たもの、それは何であったか。

ああ わが天を仰ぎ求める眼は

この地上地獄の奇形のものどもに目を瞠る

と同じ詩の中で述べられている。そして創刊以来取り上げてきたテーマを、一部『ハムレット』の文句をなぞって列挙している。

性と嘘、愚かさ、腐敗のもろもろ、

訛りと常套句、インキ、技術、死、

戦争と社会、暴利、政治、

役人どもの空威張り、つまらぬ奴らを相手に

立派な人がじっと堪え忍ばねばならぬ屈辱、

芸術と自然、愛と夢――

とこう並べたてたあと、

さまざまな動機はどこから生まれるにせよ、

創造の御業にその栄光を甦らせること、

そうしたすべての後に、浄められた人間は

魔法のように再び彼の言葉を見出すのだ

と続けている。腐敗した精神の浄化と再生を通じてしか

人間は本来の言葉を再び取り戻すことができない、とク

ラウスは言うのである。実際、『炬火』の三十七年にわ

たる全活動はこの本来の言葉、真の言葉の再生に向けら

れていたと見ることができる。というのも本来的でない

偽りの言葉、嘘と常套句フレイクスこそが今日の精神の腐敗をもた

らしたのだとクラウスは考えるのであるから。そして言

葉の腐敗を引き起こした元凶は、常套句フレイクスによって成り立

ち、常套句フレイクスをその本質とするジャーナリズムの言葉であ

る、と彼は推測する。そこで新聞ジャーナリズムの言語が彼の飽くことのない批判と攻撃の的となる。

ジャーナリズムの隆盛は、ウィーンの町の大規模な都

市改造たる環状道路リング・シュトラッセの建設に象徴される都市化と産業化

の副産物であった。ドイツ以上に産業の後進国であった

オーストリアにおいても十九世紀後半になってようやく

産業化の波が押し寄せ、中欧の首都であったウィーンに

は周辺から（東欧からも）多数の人口が流入する。爆発

的な人口増大による大衆社会の出現と、産業家層を基盤

とする自由派（と自由主義イデオロギー）の政治的勝利

こそは新聞ジャーナリズム隆盛の絶好の条件となった。

新聞というマス・メディアが急速に大衆に普及し、社会

に大きな影響力を振るうようになる。こと言語に限って

も、国民言語に及ぼす新聞の影響力は絶大であった。

『炬火』に掲載された言語関係の論説を集め、クラウスの死後刊行された『言葉』（一九三七）の冒頭の題辞のひとつ、ショーペンハウアーからの引用文に「およそ活字を読む人間のたしかに十分の九以上は新聞のほかには何も読まぬ連中であり、その結果、彼らの正書法、文法、そして文体が新聞を手本に形成されるのはほとんど避けられない」という文句が見えるが（クラウスはこの箇所全体を隔字体にして強調している）、事情は当時のウィーンでも全く同じであるとクラウスには思われた。

やや話は逸れるが、ウィーンの新聞界にあって大きな地歩を占めていたのはユダヤ系の人々であったこと、そして新聞ジャーナリズムの告発者クラウス自身またユダヤ人であったこと、に関わる問題について少し触れておきたい。先に叙べたオーストリア、とりわけ首都ウィーンの産業化・都市化を促進した中欧および東欧からの大量の移住民の中には多数のユダヤ人が混じっていた。彼

らは土地を持たぬ者として旧社会の経済基盤たる農業から締め出され、やむなく金融や商業に携わってきたのであるが、近代の進展と産業化の波に乗り、個人の才覚と努力がものを言うこれらの分野にあって経済的成功を収め、社会的地位を著しく向上させる者が少なからず現われた（近代におけるユダヤ人憎悪は、土地によって成立していた静的な中世的農業中心社会に経済的およびイデオロギー的基盤を持っていた貴族と農民、そして職人ら、新時代にとり残された者たちの新参者の成功者、時代の新しい主人公への嫉みと怨嗟がその本質にはかならなかつた）。経済的に成功したユダヤ人たち、とりわけその第二世代は学問や芸術などの知的・文化的方面にも進出してゆく。「大部分のユダヤ人の実業家は、自分たちの息子を「大学で」勉強させた。こうしてすべての知的職業のいわゆるユダヤ化が生まれた。」とシオニズムの父テオドーア・ヘルツルは書いている。³⁾ ジャーナリズムもその例外でなく、「貨幣および言論のユダヤ人支配」⁴⁾（民

族主義、反ユダヤ主義の領袖ゲオルク・フォン・シェーネラーの言葉」と誇張して評されたように、当時のウィーンの新聞界には多数のユダヤ人ジャーナリストが活躍していた。なかでもその筆頭格は、当時のウィーンの代表的新聞であった『新自由新聞』^{ノイエ・フライエ・ブレン}の発行者で編集主幹をしていたモーリッツ・ベネディクトで、彼の力の大きさはロンドンの新聞『タイムズ』のウィーン駐在通信員がこう伝えているほどである。「オーストリア・ハンガリー」二重王国の最高権力者はフランツ・ヨーゼフ「皇帝」であるが、それはベネディクトを除いての話である⁽⁶⁾。このように進歩的なブルジョワ自由主義を掲げるこのユダヤ系の新聞の権威は絶大なものがあり、その権威と影響力のゆえにこそ『新自由新聞』は非常にしばしばクラウスの攻撃の槍玉にあげられることになったのであった。クラウス自身、事業に成功したユダヤ人実業家（紙袋製造業者）を父に持つユダヤ人二世であったが、彼の『新自由新聞』に対する諷刺やハイネ批判をいわゆるユダヤ

人の自己憎悪と解することは適当でないだろう。ハイネについては後にあらためて述べるとして、『新自由新聞』の場合、その絶大な権威ゆえに、典型的な事例を槍玉にあげて一点集中攻撃するのを常としたクラウスのこの戦法の犠牲となったと見るべきだろう。クラウス自身のユダヤ性に対する態度ははなはだ複雑な、あるいは屈折したもので、容易にその胸の内を窺い知ることを許さぬものがある。実際、彼は一八九九年にユダヤ教会を離脱し、一九一一年にカトリックの洗礼を受けたが、一九二三年にはまたもやこちらの教会からも離れている。これに関連するものとして彼は次のような謎めいた、あるいは曖昧な言葉を残している。「わたしは自分のプライヴェートな問題に口を入れたくない⁽⁶⁾。」「わたしはキリスト教徒たるに十分ユダヤ人でない⁽⁷⁾。」入信と棄教を繰り返した彼の謎めいた行動の動機はともかく、後者の言葉からは彼がユダヤ教以前の人間存在、キリスト教やユダヤ教を超えた普遍的人間性の理念のようなものを信奉していた

らしいことは少なくとも窺えよう。この問題はそれだけでひとつの独立した論文のテーマとなるもので、ここまではこれだけにしておいて話を元に戻すことにする。

クラウスのジャーナリズム批判は、その言語とともに、とりわけその道徳的偽善とセンチシヨナリズムに向けられていた。社会悪と闘う正義の守り手というポーズを装いながら裏で恐喝をこととする新聞、性という最も私的な領域において、たとえば同性愛や売(買)春という秘密を暴露し、あるいはそれをタネにゆすり、ひとりの人間を破滅させる新聞(それが国家枢要の人物である場合だと政治を歪めすらする危険性があった)、そのような新聞が暴威をふるうところ正義は存在しえず、かわりに偽善が幅をきかせ社会は腐敗するほかない。また男性社会の抑圧という問題は閑却して、市民道徳という美名のもとに人妻の姦通事件を断罪する裁判所と市民社会の偽善と偽瞞、そしてそれを偽善的道德と覗き見趣味からスキャンダルとしてセンチシヨナルに報じること以利

得を稼ぐ商業ジャーナリズムの卑劣、これらはいずれもクラウスには許し難いことに思われた。彼は新聞、そして国家と社会の個人生活への介入に反対する。彼はある人妻の姦通事件の新聞報道に関して、「この姦婦は一つでなく百もの晒し台に杭打たれて世間の晒し物にされ、指責めの拷問具だけで新聞というものを知らなかった中世が与えることのできなかつた責め苦を堪え忍ばねばならなかつた。」と書いている。また「魔女裁判の技術はジャーナリズムという魔術の改良によって前代未聞の改良を遂げた」とも言っている。個人生活を破壊する言論メディアの暴力性にクラウスは最も早く気づいた人であった。私的領域への国家と社会(そしてその走狗としての新聞)の介入は個人の自由と独立を侵すのみならず、人間と精神の尊厳をも危うくするものであった。

このような新聞や社会と闘うためには、検閲以外の何物をも意に介することなく——官憲の検閲に対しては彼は反語と韜晦という尻尾をつかまさぬ目眩ましの戦術を

持っていた——齒に衣着せず自由にものが言えるためには、個人雑誌に拠るほかなかった。彼は『炬火』を刊行する前、一時ウィーンの有力な週刊誌『秤』^{ツァーゲ}の編集部に属していたのだが、そこを辞めるに至った理由を彼一流の言い方でこう言っている。「書いてはいけない一切のことを書くのに要求されたであろう時間よりも、毎週書いてよいことについて考えねばならない時間の方が多くかかった。⁽¹⁰⁾」実はこの時、『秤』誌編集部退任を知った『新自由新聞』^{ノイエ・フライエ・ブレッセ}の発行者モーリッツ・ベネディクトから、この稀に見る早熟の才能の持主クラウスを自分の新聞にコラムニストとして迎えたいとの申し出があったのだ。た。(クラウスの批評精神の早熟ぶりは、彼の最初の劇評が『ウィーン文芸新聞』に出たのが十八歳のときだったという一事をもってしてもわかる。彼と同年の hoffmann スタイルの早熟ぶりも有名だが。クラウスの異常なまでに——ときに意地悪なまでに——鋭い研ぎ澄まされた観察眼はどのようにして養われたのか。嘲笑好きな彼

はギムナジウムの生徒のとき、教師の癖を真似るのが得意で、よく同級生の喝采を博したと伝えられるように、それは殆ど天性のものであったと言っただけだが、発育が悪く脊椎が少し湾曲していたという肉体的コンプレックス⁽¹¹⁾、そのような彼が早くも思春期に最愛の母を亡くしたことの心的トラウマ、さらにおそらくはまたユダヤ人という社会的負性が、彼を辛辣な諷刺家にして精神の殉教者に育てるのに与って力あったろうことは想像に難くない。『新自由新聞』にコラムニストとして迎えられ、することはもともと若いクラウスにとって夢であった。「芸術好きのウィーン子にとって新聞文化欄^{フレイエト}はジャーナリズムの華であったが、名のある文士たちの夢は『新自由新聞』に自分の書いたものが載ることであった。……『新自由新聞』に自分のエッセイが掲載されることはオーストリア文壇に迎えられることと同義であった。」⁽¹²⁾と言われるほどだったのだから。だが今やクラウスはこの申し出を固辞し、不退転の決意で個人雑誌『炬火』を発刊

する。彼はもう商業ジャーナリズムとは心の中で袂別していたのだ。否むしろ不倶載天の敵として非妥協的にペンによる戦いを始める。『炬火』はクラウスにとって誰にも明け渡すことのできぬ戦いの砦であった。

これは殆どエピソードに属することだが、クラウスが『炬火』に傾けた精力とエネルギーはすさまじいものであった。彼はこの雑誌の執筆と編集の仕事に日に十六時間から十八時間を捧げたと言われる。まさに超人的というほかない仕事ぶりであった。それは生涯に三万頁という書いた分量の大きさもさることながら、それよりむしろ彼の文というものに対する異常なまでの情熱のせいであった。「文というものはひとつの^{テクニカル}姿⁽¹³⁾であって単なる構文ではないのであり、意味を強めるだけでなく、どの概念をも十分に生かしきるだけの力を持たねばならない⁽¹³⁾」と信じるクラウスが、「ただひとつの文章に感性と労力のすべてを傾注する⁽¹⁴⁾」結果なのだ。「ひとはそのつどそれが初めてであるかのように、そしてまたそれが最後で

あるかのように書かねばならない。ひとはそれが別離の言葉であるかのように言うべきことを言い、そしてそれがデビューの場であるかのように見事に言わねばならない⁽¹⁵⁾」という警句は、それ自体言語芸術家として当然の心構えを述べたものと見えるかもしれない。だがクラウスにあってはこの言葉への情熱はほとんど偏執狂的な域にまで達している。「このような著者は自分の書いたものが出版される前にそれを二十回から三十回読み、一語一語を、その語の各行における位置すらも吟味し熟考するのであり、眠っていてもそれぞれの終わりにある語は覚えていけるし、コンマにするかセミコロンにするかを決めるのに何時間も費やすのだ⁽¹⁶⁾。」とクラウスは書いている。彼が『言葉』においてコンマや省略符^{アポストロフ}ひとつを問題にし、こうした一見些細なものにあれほどしつこくこだわったのは理由のないことではなかったのだ。彼は原稿の段階だけでなく、校正の段階でも徹底的に推敲の手を加えなければ気が済まなかった。最高十五回の校正を行

なつたと伝えられる『炬火』の誌面には、それゆえただのひとつの誤植もありえぬのであった。彼はあるアフオリズムの中でこう書いている。「わたしはわたしの文体感覚の微量秤が拒絶する一語のために輪転機を止めさせて、すでに印刷されたものを廃棄させたこともしばしばであった。」¹⁷⁾彼は『炬火』のためにいかなる労苦をも惜しまず、まさに文字どおりこの雑誌に心血を注いだのであった。

さてこれも殆どエピソードに属することであるが、『炬火』に対するウィーンのジャーナリズムの反応はどうであったか。『炬火』はクラウスにとっては戦いの砦であったが、ウィーンのジャーナリズムおよび文壇にとっては喉に突き刺さった一本のトゲであった。彼らは表面では極力これを無視・黙殺しようとした。(そしてその姿勢は、一九二五年にクラウスがソルボンヌの教授たちによってノーベル文学賞の候補に推されたときも変わらなかつた。)しかしクラウスの告発と論難、嘲笑の激し

さはしばしば陰に隠れての卑劣な反発を招いた。彼の論難は効果のない一般的批判でなく容赦ない一点集中の個人攻撃という戦法をとったために——その際は敵を徹底的にたたきのめすためには「雀を射つのに火砲をもつてする」ことさえ厭わなかつた¹⁸⁾——、相手の激しい憎悪を掻き立てて、そのため裁判沙汰になったことは勿論、暴力沙汰、つまり襲撃と暴行を受けることさえ一再ならず起こつたのである。『炬火』が刊行された年の六月末に彼は涼しい顔をして次のような第一・四半期の「決算報告書」を載せている。

匿名の誹謗の手紙……………一三六通

匿名の脅迫の手紙……………八三通

襲撃……………一件

だがこのような卑劣な脅しや暴力にもかかわらず、クラウスはそれに屈して筆を枉げることはなかつた。彼はこ

う書いている。「文筆家の勇氣は、机の許で真価を証明しなければならぬ。勇氣の本質はまさに、そしてもっぱら次の点に存する。危険な脅しによって無理やりやめさせようとされる文筆活動を、そのような脅しにもかかわらず、それを顧慮することなく、いや意識することすらなく遂行することである。生き身の姿が人目と危険に晒される路上に出たときは最高の臆病者になってよいとしても。」⁽¹⁹⁾ ここにはほとんど信念の殉教者の姿がある。

二、言語批判

『炬火』の発刊は精神と文化、そして言葉を護るための宣戦布告を意味したのであるが、その戦いの武器は言うまでもなく言葉それ自身であった。それゆえそれは言葉の戦争という様相を帯びていたわけであるが、まずクラウスの言葉ですぐ目につく特徴は、ひとつはそれが反語や逆説にみちみちたもの、というより殆どそののみから成っていると見えるようなものであることだ。それは

容易に通読を許さぬものだが、読者に再三再四思考と理解を躓かせ、あるいは立ち停まらせ、幾重もの殻の中に周到に込められた意味を噛み破って発見する喜びを味わせる。それがクラウス読解の醍醐味であつた) ろう。クラウスはアフォリズムでこう言っている。「ひととはわたしの著作を理解するためには二度読まねばならない。三度お読みになるのも結構だ。だが一度読むだけならむしろ全然読まないで頂く方がありがたい。二度読む暇のないぼんくら頭の鬱血の責任は負いかねるのだから。」⁽²⁰⁾ クラウスの反語的・逆説的文体は意識的なレトリックや技法であるよりもむしろ天性のもの、クラウスの精神そのものの発露であつた。彼自身は「パラドクスは早熟せる認識がその時代のナンセンスと衝突するとき生まれる」⁽²¹⁾ と一種の自己解説をしている。彼の屈折にみちた(そしてそれゆえに読者の自立的思考を促す)文体の特徴を示す一例として、第一次大戦の開戦に際しての彼の沈黙を弁明した「この大いなる時代に」で始まる有名な文章の

一節を紹介しておく。「人間が精神的飢餓を感じることもなしに精神的飢餓で死に、ペンが血に、剣がインクに浸される、そのような貧困な想像力に富む国々においては考えられぬことが為されざるをえず、ただ考えられるだけのことは言葉にすることができないのだ。……今や行為が言葉を持っているがゆえに、何も言うべきことを持たぬ者たちが喋り続けている。言うべきことを持つ者は前に進み出て沈黙せよ。」⁽²²⁾ クラウスにとってファウストのように「始めに行為ありき」ではなく、あくまでも「始めに言葉ありき」だった。ただし、言葉には真の言葉と偽りの空虚な言葉の二種類があった。後者の言葉が戦争と野蛮と結びついて跳梁するとき、精神と文化の国でしか生きられぬ前者の言葉は沈黙するしかない。

鋭い観察眼と反語的精神の持主であったクラウスはアフォリズムの名手であったが、そしてそれが彼の文章の魅力のひとつともなっていたのであるが、彼はまたその持ち前の鋭敏な言語感覚によってパロディーやさまざま

な語戲的技法の名人でもあった。たとえばしばしば彼の攻撃の的となった『新自由新聞』(Neue Freie Presse) は Neue Feile Presse (と揶揄される。Feile とは金で買えるという意味であり、標榜する自由主義の偽瞞とその商業主義的本質を鋭く抉り出したものである。このようなパロディーはそれが成功するとき、それは単なる言葉の洒落にとどまらず思わぬ効果を發揮する。すなわちそれによって隠されていた深層の真実が暴露されたような、あるいは本質が露見したような印象を与えるからだ。(それは失錯行為において、心の深層に潜む抑圧された欲望が表面に現われることがある、というフロイトの学説を想起させる。実際クラウスは daran vergessen (という文法的誤用においてそのような心理学的分析を行なっている。あるいはまたソシュールの「ヘアナグラム」の思想が想起されよう。) 人はこれを一旦耳にしたからには今後 Neue Freie Presse の名を聞けば必ず Neue Feile Presse (という言葉を同時に思い浮かべざ

るをえないだろう。このような真実暴露は敵にとって最も恐ろしい打撃であったにちがいない。言葉の道化師クラウスはまた、偏狭な外国語排斥論者を「Sprachreiniger」（国語浄化主義者）ではなく「Sprachpeiniger」（国語虐待主義者）だと揶揄嘲笑し、その正体を暴露する。またナシヨナリズムの非合理性と迷妄性を衝く「irrational」という混淆語をつくった彼は、第一次大戦中高らかに叫ばれた「Glorreiche Offensive」（栄光にみちた攻撃）という文句に「Chlorreiche Offensive」（塩素ガスにみちた攻撃）という真相を敏感に聴き取るのである。そしてこの変換や転移の手法は単語のレベルだけでなくテキストのレベルでも行なわれた。そのときその言説は異なるコンテキストの中で違った意味を獲得し（付与され）、その醜悪な本質が照らし出されるのであった。

さてクラウスが撃とうとしたジャーナリズムの言葉はどうであったか。それは常套句によって成り立ち、常套

句を本質とするものと彼には思われた。常套句とは体験に裏づけられぬ、誰のものでもない借り物の言葉、思想の肉体を持たず、内的本質を欠いた機械化された言葉、言葉の亡骸にすぎなかった。それはまさに言葉を単に意味（思想）の運搬物とみる道具的言語観の延長上にあるもの、それとパラレルなものであった。だがクラウスにとって言葉は決してそのようなものではなく、またあってはならなかった。「言葉は思想を被い包むのではなく、言葉の中に思想が生い育つのだ」とか、「言葉は思想の母であって下女ではない」、「語から新しい思想がわたしに生まれてくる。そしてその思想は、それを生んだ言葉を溯って形成する。……言葉は思想の女主人だ」といった『アフォリズム』の中の言葉は、一般に流布している道具的言語観と真っ向から対立し、それを覆そうとするかのように見える。ここでクラウスは言葉の自律性^{アクトンミ}、いやそれ以上に、言葉の思想に対する創造的で密接にして不可分な内的関係を謂っているのだ。そしてそれこそ

思想伝達をこととする常套句^{フレイズ}の与り知らぬものであった。

言葉はまた本質と一体のもの、本質そのものでなければならなかった。「言葉 (Wort) と本質 (Wesen) —— これこそわたしが生涯求め続けてきた唯一の結合だ」とクラウスは言っている²⁴。あるいはまた『言葉』において > Sprache (言) と > Sache (事) の押韻を弁護して、「Sprache と Sache とのあいだには……密接な創造的繋がりが存在していることは何びとも否定することができぬだろう。宇宙の中にはおよそこの関係ほど深い因果関係は存在しない、と推測したくなるほどだ。」²⁵と書いているように、彼にとって言葉は人間の恣意的記号ではないのであった。そもそも道具的・記号的言語観は、主客が分裂し、世界を利用の対象として見る近代の人間中心主義に対応したブルジョワ的言語観にほかならなかった。だがクラウスはこう言う。「わたしが言葉を支配しているのではない。言葉の方がわたしを完全に支配しているのだ。言葉はわたしの思想の召使ではない。」²⁶

言葉の記号性を否定するクラウスは『言葉』の中で次のような驚くほどナイーブな実在論的言辞を吐いている。「わたしはそれを証明することはできないが、その内容の響きと違った姿をしている語はない。どの語も匂いと同じ味がするものだ、と誓って言うことができよう。(中略) わたしは、自分はその場に居合わせなかったので、初めてエメラルドを見たとき > Smaragd (と) 言い、この石からこれらの子音を読み取り、この色を聴き取らざるをえなかった最初の人間の口を証人に申請したいものである。そしてまた、何世代にも及ぶ誤った教育が自分で見たものを音声像に形づくる詩作的力をだいなしにしていなかったなら、子供ならきつと最初の人間と同じことをするに違いない。どの語も元来は詩であって、事物の完全な概念を包含している語も舌にのせられたこの詩からこぼれ落ちたものにすぎない。(中略) だが言葉は約束事でないからには、それは悟性には与えぬものを精神のために取っておくのであろう。もし精神が > Pur-

pur (紫) はなぜ第一音節にアクセントがあるのか知りたければ、紫に問いさえすればよいのだ。⁽²⁷⁾——引用が長くなったが、ここでクラウスがいささか極論する仕方^{シユプラーヘ}で強調しようとしているのは、言葉と本質、言と事^{ザツヘ}の一致を保証するものとしての体験の原初性、根源性(そして精神と根源との親縁関係)である。そしてそのようなみずみずしい世界の根源的な体験(と認識)が行なわれる場がすなわち詩であり、それをなしうるのは今日では子供でなければ詩人だけだ、ということになるのだ。言葉がそのような世界の根源の響きと今は見失われた宇宙の秘密のメッセージを蔵するものであれば(「言葉は思想の泉を探り当てる古い杖であれ」⁽²⁸⁾とクラウスは言っている)、言葉に携わるということは殆ど神の声に耳を傾けるにも等しく、それは人生の目的とすらなる。(クラウスの言語観はどこかベンヤミンの〈名称言語〉の思想を想起させないだろうか。両者の言語観が深い親近性を有することに疑いがないが、その影響関係は定か

でない。ベンヤミンはクラウス論を書いているが、クラウスがベンヤミンに言及したことは一度もない。ただいずれにしてもクラウスの思考の体質は言語そのものを厳密な論理構成によって体系だてて考察することとはおよそ無縁であった。)

クラウスは本質と乖離せぬ、思想の肉体を持った詩的言語の根源性を強調したのであったが、ジャーナリズムの言葉は常套句である以前にそもそも基本的に報道・伝達のための言葉であった。「造形としての言語に言葉の^{ヴォルト}価値を置こうとする試みと、伝達としての言語にその価値を置こうとする試みとは……いかなる共通の認識の交点でも出会うことがないように見える。」⁽²⁹⁾とクラウスは書いている。前者は芸術の言語、詩的言語であり、後者は意味伝達のための道具化された報道言語である。「芸術作品と実用品を分離することが「アドルフ・」ロースの第一の関心事であったとすれば、^{インフオマツィオン}報道と芸術作品とを別にすることがクラウスの第一の関心事であった」

とベンヤミンは述べている⁽³⁸⁾。実際『言葉』において、たとえばシラーの『ヴィルヘルム・テル』の中の有名な句「Es rast der See und will sein Opfer haben.」（湖水は荒れ狂い、生贄を求めている）は詩だが、「Der See rast und will sein Opfer haben.」（とすれば報告になる、⁽³¹⁾）と言われる。ここで es への問題はさておき、一般にクラウスにとって散文とは報告のための言葉だったように思われる。それは創造的な詩的言語の持つ根源的生命を欠いており、言葉の原初の息吹を失った頹落した言葉にすぎなかった。「散文というものの持つ諸々の罪や根本悪⁽³²⁾」という言葉はそのような見解から出て来たものだ。そしてこの散文に対する否定的見解は、散文によって構成される小説に対しても適用される。彼はこう書いている。「この小説という芸術形式は他の芸術形式とは異なつて言語創造なしに済ますことができるものであり（報告や心理学といった、言葉とは関わりのない他の一切のもののために）、そしてその統制不能な広がりの中で、作

用すべき作者の個性は効果のために主権を放棄するのである。わたしには文の芸術以外にそもそも言葉の芸術は存在しないように思われるのに、小説においては文ではなく素材が出发点になっているのだ。⁽³³⁾」クラウスにとって芸術において問題なのは言葉そのもの、文そのものであった。「文ができない者たちは生活内容のところから書き出す。ところが彼らは文ができないために生活内容の持ち合わせがない。文がうまくできてこそ生活内容が存在するのだ。」⁽³⁴⁾とさえ言うのである。（これはおそらく新聞文化欄作家に対するあてこすりであろう。）クラウスにとって言葉（と文）、詩的言語こそ創造作用を有するものであった。

それに反し、ジャーナリズムの言語は思想伝達的手段としての報道言語であり、そこでは常套句が跳梁していた。そしてそれは意見⁽³⁵⁾となって世上に流布する。「意見は伝染する。思想は瘴気だ」とか「思想は愛から生まれた子である。意見は市民社会で認知されている⁽³⁵⁾」といっ

た言葉は、意見の非人格性と無思想性、そしてそれに対する思想の根源性、創造性を謂ったものだ。意見は常套句によって成り立ち、担われるものである。ベンヤミンは『カール・クラウス論』の中で、「常套句とは思想を流通可能なものにする商標である」と言い、「意見は、個人から遊離させられて商品の流通に同化されうる、偽りの主観性である³⁶⁾」と、両者がブルジョワ的・道具的・記号的言語観の産物であることを見抜いている。そのような創造的根源とは無縁な常套句と意見がジャーナリズムと、そしてジャーナリズムが絶大な影響力を持っている社会に蔓延するとき、人々の自立的思考は停止し、精神は窒息するほかない。そもそも本質を欠いた言葉は思想なき空語であり、》Sache (事) と乖離した》Sprache (言) は嘘にほかならないのだ。頹落し腐敗した言葉と嘘の横行は精神の腐敗を招来し、文化を破壊せざるをえない。それはやがては戦争をすら惹き起こし、早晩世界の没落と人類の破滅をもたらすことになる筈であっ

た。実際、第一次大戦がその最初の帰結だった。そして、「根源に近づけば近づくほど戦争から遠ざかるのだ。もしも人類が常套句を持ちさえしなければ、人類に武器は無用になるだろうに。誰しも自分の言葉に耳を傾け、自分の言葉に思いをこらし始めなければならぬ。そうすればすべての失われたものが甦るであろう³⁷⁾」(一九二一年六月)と痛切な訴えの叫びをあげていたにもかかわらず、もっと恐ろしい災厄である嘘と常套句の国、ナチス国家がその第二の帰結となった。(この国が宣伝省という歴史上特異な制度を必要としたのはこの国家の本質を物語っている。) ナチ帝国の成立という精神と文化の危機の中で書かれた『何故炬火は発刊されないか』(一九三四年六月)という文章の中でクラウスは、「ナチズムが新聞を壊滅させたのではなく、新聞がナチズムを生み出したのだ」、「言葉の淫らな使用が血の残虐行為を招来したのだ³⁸⁾」と言っている。クラウスはある意味でこのような帰結を予見し、生涯にわたって警告を発し続けたの

であった。彼の新聞ジャーナリズムに対する闘い、言語批判はそのような精神と文化の防衛戦略の要としてあったのだ。だが彼の警告にもかかわらずナチの帝国が成立したとき、彼は最後の精力を『言葉』の編集に傾け、まるですぐ身近に迫ったナチの魔手から逃れようとするかのように急ぎ足でこの世を去ったのであった。(一九三六年六月)

三、エロスとしての言葉

「意見のジャーナリストが存在するように、情緒のジャーナリストが存在する。後者とは俗耳に訴える抒情詩人のことである。」⁽³⁹⁾ というアフォリズムはその甘美な抒情詩が大衆に愛好された詩人、ハインリヒ・ハイネを諷したものである。クラウスはハイネを芸術のジャーナリズム化を行なった元凶、芸術をジャーナリズムに売り渡した張本人として論難する。ハイネの抒情詩、とりわけその大衆の耳に媚びる甘美なメロデーはクラウスから見れ

ば空虚な韻にすぎず、それは思想内容の空虚を蔽い隠す単なる装飾にすぎなかった。「二種類の文筆家が存在する。本物のそれと贗物のそれだ。前者にあっては内容と形式は魂と肉体のように一体を成している。それに対して後者にあつては内容と形式が合っているのは肉体と衣服の関係と同じだ。」⁽⁴⁰⁾ というアフォリズムに即して言えば、まさに後者の文筆家の典型がハイネなのであった。すなわちハイネにあつては言葉は思想の肉体を飾る衣服にすぎず、それはクラウスの言語理念、芸術理想と背馳するもので、墮落した芸術、偽りの芸術にほかならないのであった。(『言葉』には「ジャーナリストティックな趣味の世界に反対するわたしが、芸術を誤解し言語を墮落させるパンドラの箱だと断言する大衆受けするハイネ詩節」⁽⁴¹⁾ という言葉が見える。)

クラウスは己れの芸術理想をこのハイネと対極のところ、すなわちシェイクスピアの自然性と創造性、そしてゲーテの純粹芸術の理念と生と文化の思想に見出す。ハ

イネは、ゲーテの死とともに芸術時代が終焉した、と言ったが、クラウスにとってゲーテの芸術理念は決して終焉させてはならぬものであった。芸術は生の装飾などではなく、純粹な生の表現でなければならなかった。彼にとって生こそが最高の目的、最高善であり、言語と精神と文化はその生の別名にほかならないのであった。その意味で彼はエステートでなくモラリストであった。ハイネ詩節の美は装飾の美、偽りの美にすぎなかったが、審美家の美とは本源的生命から逸脱した頹落せる美なのだった。「審美家の美に対する関係は、ポルノ作家の愛に対する、政治家の生に対する関係のごときものだ⁽⁴²⁾」と彼は皮肉っている。(彼がアドルフ・ロースとともにクリムトラの装飾的な新しい芸術運動を排撃したのは、そこに生の衰弱と精神と文化の頹廃を見たからにほかならなかった。)クラウスがヴェルフェルら、言語の(暴力的)革新によって新しい調べを奏でようとしたプラハの若き表現主義詩人たちを批判したのも同じ芸術理念に拠る。衣服、

意匠にすぎない表面的な新しさを追求することよりも、根源的な生命に耳を傾け、その言葉を聴き取ることこそが何よりも大切なのであった。

わたしは言葉の古い家に住む

模倣者のひとり⁽⁴³⁾にすぎぬ

とクラウスは言う。常にあらたに生命を創造する永遠の根源にあってはほんとうは新しいも古いもないのだ。「根源にあっては剽窃者というものはない」、「古き言葉は万人のものである。何びともそれを占有することはできない⁽⁴⁴⁾。」といった警句はそこから生まれている。クラウスはそれを明言したことは一度もなかったが、もしかすると無(潜)意識の深層に言葉と思想の原形式のようなものを想定していたのではあるまいか。(だとすればそれは〈間テクスト性〉や〈ポリフォニー〉の問題に繋がってくる。)「言葉は愛同様、世界の暗闇の中で失わ

れた原像を手さぐりで探し求めるのだ。詩は作られるのではなく予感されるのだ⁽⁴⁶⁾という言葉はその推測の間接証拠となろう。(あるいはやはり彼の言語理念はベンヤミンの〈純粹言語〉もしくは〈アダムの言語〉に近いのかもしれない。)そのような思想をクラウスは必ずしも十分に展開しているわけではなく、それゆえ臆測の域を出ないのであるからこれ以上深入りすることは控えることにするが、いずれにしても創造的な生命の根源から尽きることなく言葉を汲む者にあつては、創造も模倣もなく、むしろ彼は本来言葉の媒介者、言葉の誕生に立ち合っている、生まれたばかりの嬰兒を取り上げる産婆にはかならないのであつた。それゆえ〈模倣〉はなんら詩人(芸術家)にとって恥ずべきことではなく、実際クラウスも、パロディーとは別に、旧約聖書やシェイクスピア、ゲーテなどからしばしば〈本歌取り〉を行なっている。「言葉の古い家に住む模倣者^(モビイター)」とはそういう意味だ。「言葉たちの呼吸する空気を言葉たちに与えることができる者は、

彼がそれらの言葉をそのまま横領しただけとしても、それゆえに剽窃者ということには決してなるまい。そして、修正する詩人が語の置換によって語の形姿^(ゲシュタルト)を開花させることができるならば、彼は他人の詩を手がかりにしてであろうと、自分の詩を創造することになろう。⁽⁴⁶⁾」という言葉はそのような思想から出て来たものだ。同じ思想はまた次のように「言葉」を「思想」と言い換えてパラフレーズされている。「思想は発見物、あるいは再発見物だ。それを探し求めた者は正直な発見者となる。たとえば彼以前にすでにそれを発見した他の人があつたとしても、それは彼の所有物となる。⁽⁴⁷⁾」近代芸術家にとっての最高の価値、いわゆる〈オリジナリティー〉は問題ではないのだった。それゆえにこそヴェルフェルらの抒情詩は単に表面だけ新しい形式にすぎぬものとして拒絶し(「新しい形式とは常に無能力の逃げ道にすぎない⁽⁴⁸⁾」、それと反対に、創造的根源に由来するシェイクスピアの言葉や、日常の平易な言葉によって構成されたゲーテの、

内容と形式の一致において完璧な詩『旅人の夜の歌』、あるいはクラウディウスの民謡風に素朴でしかも深い内面性を湛えた詩を称賛し、愛惜してやまなかったのである。そしてゲーテの『イフィゲーニエ』の最後に発せられる、この上なく日常的で単純だが、万感こもった真実な言葉「*ごきげんよう*」(Lebt wohl!)を「ドイツ語最大の奇蹟的言葉」と評し、ここにこそ「(ハイネには無縁であった)古き言葉の誕生の秘密」⁽⁴⁹⁾が存するのだ、と述べられるのである。

クラウスの言う「古き言葉」は創造的な根源に由来する言葉なのであった。『わたしの矛盾』と題する詩にはこの〈根源〉のことが言われている。

かれらが生を嘘の軛の下に置いたとき

わたしは革命派になった。

かれらが自然に反して規範を固執したとき

わたしは革命派になった。

そして生きて苦しむものとわたしは苦しみを共にした。

かれらが自由を常套句ツレックスのために利用したとき

わたしは反動派になった。

かれらが芸術をかれらの能力によって汚したとき

わたしは反動派になった。

そしてわたしは根源へと戻って行った。

この詩はクラウスの生と活動をみごとに要約している。彼が全存在を賭して護ろうとしたのは生であり、自然であり、自由と芸術であった。そして彼はそれらの諸価値を護る闘いにおいてそのつど常に創造的根源に立ち還り、その声に耳を傾けたのだ。ところでクラウスにとって言語こそはこの創造的な有機的生命の発現なのであった。その思想は彼の死後刊行された『言葉』の隋処において出会われるが、その頂点を成し、彼の言語観の特徴が最もよく表れているのはその中の『韻』という小論である。

そこではまずモットーとして同名の詩『韻』からの一部が掲げられる。

韻は岸边、二つの思想が

示し合わせて上陸する

クラウスにとって脚韻は、「記憶の音響的強化にすぎず、それがなければ失われてしまうような発言の音声的補助手段」でもなければ、「それがなくとも本体は依然として残っているようなお添えもの」でもなく、また「それがなければ何の注意も惹かないようなものの飾り⁽⁵⁰⁾」でもないのだった。「韻はただオイフォーリオンの例のみがそうであるように思想の交合から生まれる⁽⁵¹⁾」そういうものだったのだ。ここでオイフォーリオンとは言うまでもなく、ゲーテが『ファウスト』第二部において造形したファウストとヘレナの子で、ゲルマンの北方的ロマンの原理とギリシャの南方の古典的原理の結合の体现・象徴

である。そこでは異なる二つの文化と原理が和合し睦び合う様が、ファウストが押韻というものを知らなかった古代ギリシャ人のヘレナにその手ほどきをするという仕方では象徴的に描かれている。クラウスはこの場面に押韻の原像、原現象を認めるのだ。「思想の交合」という言葉が示すように、韻においては「エロスの原理⁽⁵²⁾」が働いているのであった。彼は次のようにさえ言う。「韻好みの一方の片割れによって挑まれ奪われる他方の片割れが、交合を可能ならしむるためにまず言語の着衣を脱ぎ、あるいは脱がされることは、エロスの要求にほかならない⁽⁵³⁾。」そして審美的な形式主義者が言うところの不純な韻に存する押韻のための「障害」あるいは「抵抗」は、むしろ「障害を克服する」ために、言いかえると、「障害にもかかわらず韻の肉体そのものに到達するために」「もう一方の片割れ」の「助走」力を増し、結合を「促進する⁽⁵⁴⁾」ものとなるのだ。韻は「響き⁽⁵⁵⁾であると同時に二つの感覚ないし想像の世界を同化させずにおかぬ強制⁽⁵⁶⁾」なのであつ

た。そしてそのようなものとしての韻は「思想風景の頂⁽⁵⁶⁾き」とされ、「思想は韻において頂点に達しなければならず、また思想は韻において体験されてこそ韻に報い、韻によって報われるのである⁽⁵⁷⁾」と言われるのだ。

このクラウスの注目すべき独特な韻の思想はまさに彼のエロスの言語観から生まれたものだが、それは世間一般の見解とどんなに隔たったものだったろう。「詩人と生活の表具師のようなもので韻は音響的装飾なのだとする一般の見解は、韻に対して唯一〈純粹さ〉という理論上の要求をおこなう」のであるが、「形式⁽⁵⁸⁾という基準ではなく、^{ゲシュタルト}形姿という基準が韻の価値を決定する」^{ゲシュタルト}であり（この「形姿」という概念はクラウスの有機的言語観に由来するものだが、残念ながら十分な展開を見ていない）、それゆえ「純粹な韻」を要求する俗物の形式的・審美的な要求は無効とされる。韻に限らず、一般に言葉という創造的な有機的生命の領域にあっては、平板な悟性や論理はまったく無効・無力なのであった。

「論理は芸術の敵である。だが芸術は論理の敵であってはならない。論理は一旦芸術に味われ、芸術によって完全に消化されていなければならない⁽⁵⁹⁾」とクラウスは言っているが、創造的生命の発現としての芸術や言葉は論理を超えたものなのだ。彼がしばしば言語感覚を強調したのはそのためだった。それゆえ同様に、詩という芸術創造の領域に「文法学的尺度をもって近づこうとする意図は、芸術的生産の原・権利を否定するだけでなく、法則がいつかそれに己れの存在を負うことになるあの言葉の力をも否認することになるのだ。（中略）言葉の胎内にあっては一切の事が正しい⁽⁶⁰⁾とか正しくないとかの彼岸で起こるのだ。創造前の世界から言葉に対して、愛に対してよりも僅かな創造の可能性しか保存されていない、などということがどうしてありえようか。構成要素を吟味する美学的正当性は、構成要素を変化させる性愛の恣意には所詮及ばないのだ。」⁽⁶⁰⁾ここにはクラウスのエロスの言語観があますところなく語られている。言語を人間が

支配する道具と見る合理主義的言語観、そしてそれに基づくところの文法や美学（韻律学）に対して、彼は表層の論理を超越した創造的生命としての言葉というエロスの言語観を対置する。そのような言語観にあっては、「誤った語使用からさえ正しいものを作り上げることが言語には本来可能⁶¹」とされ、「文法を超えたところについて芸術的な決定が位置を占めるだろうし、外見上の誤りも、ときにはあらゆる法則に逆らって、その周囲の状況という思想的全権からすべての存在権を授けられることがある⁶²。」と言われるのだ。それどころか、「卑金属を貴金属に変える術としての言葉の錬金属にはまさに一切のことが可能なのだ⁶³」とさえ言われるのである。こうして芸術と詩人の自由、そして文法的変則と破格の権利が擁護される。

クラウスは『炬火』においてしばしば Sprachlehre（文法、字義どおりには言葉の教え）と題する小論を書いているが、通例用いられる Grammatik という語を

避けてあえてこの語を用いたのは、言葉が本来文字でなく音声によって成り立つものだという基本認識があったからなのかもしれないが、それよりむしろ、慣用の機械的・形式主義的な文法（Grammatik）から、有機的生命の発現としての言葉の内的法則を探求する学としての文法（Sprachlehre）を区別したかったからに違いない。（ソシュール風に言えばラングの文法に対するランガージュの文法ということになる⁶⁴。）すなわち、硬直し生命を失った規則の体系にすぎず、むしろ人間の精神を縛るだけのコード体系としての文法のアンチテーゼとして、彼の生命の法則としての文法を対置したのである。それは「学校文法の彼方においてようやく認識される」ものであり、そして「文体はその許可を文法の監視人から得るのではない。文体の自由は、結局統辞論的規範もそれに負うているところのある原理に基づいているのである⁶⁵。」と言われるのであるが、その「ある原理」とはむろん言うまでもなく、文法や統辞論的規範のメタ原理としての

生命の原理にほかならない。近代の合理主義的言語観に反対し、論理を超越した言葉の魔術性をすら承認しているかのように見えるクラウスはロマン主義的言語観の持主であったということもできるが、それを換言して言えば、彼が規範文法の支配と束縛に異議を唱えたのは、言葉はそもそも生命の発現なのだとする有機体的言語観から、言葉の自由を護ることは人間悟性の恣意から生命と精神の自由と可能性を護ることにほかならなかったからと見ることもできよう。

クラウスにとって言葉について考えることは、根源を同じくするがゆえのその同質性と相同性によって（その認識は直観的なもので決して理論的なものではないが）精神と生について考えることと同一のことであった。言葉は表層論理のレベル、悟性的見地から見れば変則や破格など、変幻自在で捉え難い謎めいたもの（「言語の事柄においては一切の明晰さが解消して化するときのあの謎⁶⁶」と言われる）、プロテウスあるいはキマイラのご

ときものと見える。だがそれは決して無法則でも無秩序なでもなく、そこにはなにかある、生命において働いているのと同じ秘密な原理が働いているのに違いなかった。それゆえ言葉について考察をめぐらしその秘密の深处に近づくことは、生命の秘密に迫ることにほかならないのだった。言葉についての考察がそのような意味を持つとすれば、「言語的な事柄においては決めるよりも疑うことの方が大切である⁶⁶」と言われるように懐疑というもののがきわめて積極的な意味を帯びてくる。なぜなら無限無底の懐疑こそが創造的な生命の秘密への肉迫を唯一保障し可能にするものだからだ。そもそも言語についての考察とはそのような無限懐疑の宿命を刻印されたものなのであった。「たとえそれが一個の句読点、あるいはひとつの韻についてであろうとも、言語について語られるすべての言葉は言語の無限性を開示する性質を有しているために、かかる思考は一旦それが開始されたならばいかなる終着点も存在しない。この事実こそわれわれに

とって祝福でもあり、同時にまた呪いでもあるのだ。⁽⁶⁷⁾」
 そしてクラウスはこの祝福でもあり呪いでもある懐疑の
 無限運動に進んで身を投じる。言葉こそが生命（と宇宙）
 の秘密を開示し、真理を指し示すものと信じるがゆえに。
 「わたしは生涯のあいだ、文以外のことと気にしたもの
 は何もないのだ。人類のこと、その戦争と革命、そのキ
 リスト教徒とユダヤ人、こうしたものについて真実がきつ
 と文には思い浮かんでくるだろうと信じて。」⁽⁶⁸⁾ 言語的懐
 疑は道徳的な問題に繋がっているのだった。それゆえチェ
 コの諷刺作家カレル・チャペックは「この赤い冊子の学
 校を通り抜けた者は、いわばモラル・フィロロギー（倫
 理言語学とでも訳せようか）のコースを卒業したことに
 なるのだ⁽⁶⁹⁾」と言っている。クラウスをもし唯言論者とい
 うことができるのであれば、それは認識論のレベルではな
 く、実践論のレベル、すなわち生命と道徳の唯言論者な
 のであった。彼はさらにまた言語上の懐疑を道徳に結び
 つけてこう言っている。「いったい、言語上の懐疑ほど

道徳的な事柄における強力な保障を想像することができ
 るだろうか。（中略）人間が言語のおかげで手に入れる
 ことが可能なのに、今日に至るまでないがしろにされて
 きた大きな道徳的贈物としてのあの懐疑こそ、自ら仕え
 ていると妄想している文明をまったく確実に終焉へと導
 いてゆく進歩に対して待ったをかける救済の行為でなく
 て何であろう。」⁽⁷⁰⁾ 言語上の懐疑、とりわけ一般に流布し
 ている道具的言語観に対する懐疑は、この言語観と表裏
 一体を成す人間中心の近代文明そのものに対する懐疑に
 も繋がっていたのだった。

宇宙と生命の原理を啓示する言葉こそが人間を支配せ
 ねばならないのに、それが転倒した事態になっており、
 そのため言葉に啓示された真理が見失われていることが
 問題であった。それゆえ、「言葉に対して、自ら言葉を
 口にするることによってそれを汚してしまうという関係以
 外のいかなる関係も持ってはいない」そのような人々の
 中において、「もしも人間が言葉へ、存在へと帰り行く

道を見出していたならば今存在していないであろうようなこれらの状況がますます避けられぬ必然となつて迫ってくるにもかかわらず、このような状況に置かれている言葉を破壊された生命の中から至高の財産として救い出すこと⁽⁷¹⁾が、たとえどんなに困難でも人類を没落から救うためにはなんとしても成し遂げられねばならぬ課題であった。そしてクラウスはこの課題を己れの使命と信じ敢然と引き受けたのだった。「常套句の存在するところに深淵を見てとること、これこそ罪のうちに成長した国民に対する教育的使命であろう。それはジャーナリズムの桎梏と政治の畏からの生命財の救済を意味しよう。⁽⁷²⁾」言葉を無自覚に話すことによって言葉を汚し冒瀆する者たちから言葉を救い出しその聖性を取り戻すこと、言葉を再生させることが『炬火』の使命だった。

「言葉から最も遠い所にいる者だけが言葉を〈扱う〉
 () ungehen (— 迂回する意味もある) ことができるよ
 うに、それと反対に、人は言葉に近づけば近づくほど怪

訝の念、そしてそれとともに賛嘆の念が増してゆくものである。⁽⁷³⁾」そしていったん言葉とエロスの摩訶不思議さに魅せられた者、言葉と生(エロス)の秘密の奥処を垣間見た者は、真理を認識した者だけが味わう歓喜と陶醉に襲われざるをえない。彼はそのときこの大いなる真理に一身を捧げる帰依者となる。「言葉の信奉者にとって言葉とはひとつの奇蹟であり、聖地である⁽⁷⁴⁾」とクラウスは言っているが、そのような者のひとりとして彼は言葉の使徒、伝道者となったのである。言葉という聖地、聖所を護る番人としてクラウスは熾^{セラピム}天使のごとく、あるいは忿怒の相を帯びた不動明王のごとく破邪の剣ならぬ『炬火』を振りかざし続けたのであった。そして言葉において罪をなす者——嘘を言う者、常套句を蔓延させる者、言葉を衣服や装飾、あるいは道具として扱う者——をこの恐ろしい監視人は告発し、宥赦なく罰したのであった。

復讐とわたしは言う。言葉を話す

かのすべての者たちにわたしは言葉のために復讐を
するのだ。⁽⁷⁶⁾

『炬火』の文筆活動は言葉を汚し貶める者たちに対する、
言葉の崇拜者による憤激に満ちた報復なのでもあった。
その憤りは、彼にとっての最高の価値であった言葉と精
神と生への愛の強さのゆえにそれだけ一層激しさを増し
たのだった。

クラウスの遺言として聞くこともできる『言葉』全体
の最後に置かれた同名の小論『言葉』のその最後の二節
を引用して拙論の締め括りとしたい。

「言葉こそその幻影力が無限である幻獣キマイラで
あり、生命がそれに触れて決して貧困化することのな
い無尽蔵の泉なのだ。人間はこの言葉に仕えることを
学ぶがいい⁽⁷⁶⁾」

註

- (1) Paul Schick : Karl Kraus. Rowohlt Taschenbuch Verlag, 1981, S.38f.
- (2) 「インキ」とは印刷インキ、すなわち新聞ジャーナリズムのこと(後述)。クラウスの「技術」批判はたとえば「技術——言葉の真の意味における自動車^{オートモビル}。馬なしにだけでなく人間なしにも進んで行くもの。運転手が車にエンジンをつけたあとで彼はその車に轆かれた。すべてそんな調子で行くのだ」とか、「進歩は人間の皮膚から財布をつくる」といった予言的な警句となつて表れてゐる。(Karl Kraus, Aphorismen. Suhrkamp, 1986, S.448 u.S.279)
- (3) カール・ショースキー『世紀末ウィーン——政治と文化——』(安井琢磨訳)岩波書店、一九八四年、一八九頁。
- (4) 同右、一六四頁。
- (5) Michael Horowitz : Karl Kraus, Verlag Orac, 1986, S.15.
- (6) Aphorismen, S.293.
- (7) Karl Kraus, Gedichte. Suhrkamp, 1989, S.291.
- (8) Karl Kraus, Sittlichkeit und Kriminalität. Suhr-

kamp, 1987, S.25.

- (9) *ibid.*, S.106. 邦訳『モラルと犯罪』（小松太郎訳）
法政大学出版局、一九九〇年、七四頁。
- (10) 『炬火』第五号、一〇頁。
- (11) クラウスは論敵たちから「憎まれ者のチビ男クラウス」と呼ばれていたという。(Horowitz, S.18)
- (12) Horowitz, S.16.
- (13) Karl Kraus, *Die Sprache*. Suhrkamp, 1987, S.99.
- (14) *ibid.*, S.49.
- (15) *Aphorismen*, S.134.
- (16) Horowitz, S.27 (再引用)
- (17) *Aphorismen*, S.133.
- (18) Horowitz, S.33.
- (19) 『炬火』第六〇一―六〇七号、四五頁以下。
- (20) *Aphorismen*, S.116.
- (21) *ibid.*, S.164.
- (22) 『炬火』第四〇四号一頁以下。
- (23) *Aphorismen*, S.135, 235, 325.
- (24) *ibid.*, S.431.
- (25) *Die Sprache*, S.331f.
- (26) *Aphorismen*, S.134.
- (27) *Die Sproche*, S.315f.
- (28) *Aphorismen*, S.236.
- (29) *Die Sprache*, S.371.
- (30) Walter Benjamin, *Gesammelte Schriften*. II-1, Suhrkamp, S.336. 邦訳『ベンヤミン著作集7 文学の危機』（高木久雄・佐藤康彦訳）晶文社、三六頁以下。
- (31) 詳しいことは『言葉』中の「es」や「主語と述語」の項を見ていただくとして、クラウスがこの日常最もよく使われる、そして最も些細な語についてどれほど深く考え、そして深い洞見を得たか、一例を挙げておきたい。彼はいわゆる〈前置されたes〉について、「それは「思想的、詩作的準備という機能を担っている」と看破し、「この〉Es〈において主語が告知されるのだ。この〉Es〈は主語に関与しているのだ。ことに〉Es war einmal ein König〈（むかしむかし王がいた）は〉Ein König war einmal〈という言ひ方によって代えらるることはできないだろう。王は遠い過去という時間の中から出て来なければならぬのだから。」（*Die Sprache*, S.395f.）とついに鋭く豊かな言語的感性を示している。

- (32) Die Sprache, S.181.
- (33) *ibid.*, S.206.
- (34) *ibid.*, S.276.
- (35) Aphorismen, S.112 u. S.237.
- (36) Benjamin, S.337 u. S.343. 邦訳三八頁および四十七頁。
- (37) Die Sprache, S.225.
- (38) 『炬火』八九〇—九〇五号 一四二頁および一六八頁。
- (39) Aphorismen, S.241.
- (40) *ibid.*, S.111.
- (41) Die Sprache, S.345f.
- (42) Aphorismen, S.335.
- (43) Gedichte, S.93.
- (44) Aphorismen, S.328.
- (45) *ibid.*, S.338.
- (46) Die Sphache, S.366.
- (47) Aphorismen, S.237.
- (48) Die Sprache, S.339.
- (49) *ibid.*, S.365.
- (50) *ibid.*, S.293 u.S.357.
- (51) *ibid.*, S.294.
- (52) *ibid.*, S.328.
- (53) *ibid.*, S.325.
- (54) *ibid.*, S.325.
- (55) *ibid.*, S.323.
- (56) *ibid.*, S.328.
- (57) *ibid.*, S.296.
- (58) *ibid.*, S.323f.
- (59) Aphorismen, S.325.
- (60) Die Sprache, S.116f.
- (61) *ibid.*, S.24.
- (62) *ibid.*, S.132.
- (63) *ibid.*, S.96.
- (64) *ibid.*, S.88.
- (65) *ibid.*, S.311.
- (66) *ibid.*, S.89.
- (67) *ibid.*, S.357.
- (68) *ibid.*, S.276.
- (69) Schick, S.152.
- (70) Die Sprache, S.372.
- (71) *ibid.*, S.356.
- (72) *ibid.*, S.373.

- (73) *ibid.*, S.311.
- (74) *ibid.*, S.357f.
- (75) *Gedichte*, S.93.
- (76) *Die Sprache*, S.373.

〈付記〉

『言葉』からの引用はすべて法政大学出版局より近く刊行予定の邦訳書（武田昌一、佐藤康彦、木下康光訳）に拠った。本書の翻訳はかなり難事業であったが、その完成を見ることなく帰らぬ人となられた武田昌一先生に拙論を捧げる。